

# Saul Bellow の *The Victim* と Bernard Malamud の *The Assistant* における Jewish Problem

——小説の素材とその意義——

岩 山 太 次 郎

When the individual values the community  
as his own life and strives after its  
happiness as though it were his individual  
well-being, he finds satisfaction  
and no longer feels so keenly the bitter-  
ness of his individual existence, because  
he sees the end for which he lives and suffers.

ACHAD HA'AM  
(Asher Ginzberg)

Saul Bellow (1915- ) の *The Victim* (1947) や Bernard Malamud (1914- ) の *The Assistant* (1957) は、普通よく、ユダヤ人を描いた小説であるとか、ユダヤ人という人種問題をテーマにした小説であると言われるが、これらの小説における Jewish problem ということは、実は表面的な素材であって、小説の奥にあるのは、そういう狭いものではないようである。

現代アメリカの小説家の中には数多くのユダヤ人作家達がいるが、彼等を大別すれば、三つのグループに分けれるのではないかと思う。

第一のグループは Jewish background を利用して、アメリカにおける

ユダヤ人移民達の使う broken accent を多用したり、ユダヤ人を作中人物にしたりして、そういうものに焦点をしばる作家達である。彼等の作品では、stage setting がいささかエキゾチックなために、作者自身の大きな vision や ambiguity などが犠牲にされて、作者は自分のおかれている特殊な環境を sentimentalize する傾向がある。例えば、Herman Wouk (1915- ) の *Marjorie Morningstar* (1955) がそうであるし、hardboiled style で有名な Jerome Weidman (1913-<sup>1)</sup>) のいくつかの作品もその例であろう。Herman Wouk にみられるように、技巧の点で読者をひきつけるため best-seller になる要素は多分にあるが、概して、これらの作家は low middle-brow であると言えよう。Leslie Fiedler はこの種のグループに J. D. Salinger (1919- ) の作品も入れているが、次のようにその特長をとらえている：

In the typical middle brow novel (Salinger, Shaw, Wouk), it was seldom a real Jew who was exposed to persecution; rather some innocent gentile who by putting on glasses mysteriously came to look Jewish or some high-minded reporter only pretending to be a Jew....what is involved is the commercial necessity for finding a gimmick to redeem on otherwise overworked subject.<sup>2)</sup>

このグループには、problem novel といわれる Irwin Shaw (1913- ) の *The Young Lions* (1948) や anti-Semitism を攻撃した Laura Hobson (1900- ) の *Gentlemen's Agreement* (1947) も入れてよいであろう。

第二のグループは Jewish background というものを殆んど問題にせず、個有な abstract framework の中で作品を書こうとする作家達である。現代の New York の生活を描いた Nathanael West (1904-1940) の *Miss Lonelyhearts* (1933) や Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951) がこれであろう。それらは非常に effective で、emotional な力強さがあり、人を承服させるものをもっている。そして、概して、upper-

middle brow の文学であると言える。

Local-colorists の立場とはちがった意味で、Jewish-American background を小説の frame として使っている作家が、第三の傾向をもった作家である。Yiddish folklore の世界と、アメリカにおけるユダヤ人の生活を混合させて、それを小説の frame として使おうとする作家で、彼等は非常に high brow な作家である。例えば、*The Structure of Literature* (1954)を書いている Paul Goodman (1911-<sup>3)</sup>) がそれである。又、*Goodby, Columbus* (1960) で1960年度の National Book Award を受けた若手の Philip Roth (1933- ) の “Goodby,Columbus” や長篇小説 *Letting Go* (1962) はこの特質をよく表わしたものである。

*The Natural* (1952), *The Assistant* (1957) や 1958年度の National Book Award を受けた短篇集 *The Magic Barrel* で注目された Bernard Malamud<sup>4)</sup> と *The Victim* (1947) や *The Adventures of Augie March* (1953) (1953年度 National Book Award を受く)<sup>5)</sup> の Saul Bellow はこの第三のグループの中心になる作家である。

さて1947年に出版された *The Victim*<sup>6)</sup> は、最初に述べたように Jew 対 anti-Semite を素材とした小説である。この小説のタイトルは “The Victim” (「犠牲者」) であるが、一体誰が “victim” なのか、Jew 対 Gentile という人間の関係がいずれかを “victim” にするのであろうか、この小説の二つの epigraphs の内、*Thousand and One Nights* からの方は何を意味するのであろうか、というような問題を考えなければ、我々はこの作品を理解出来ないであろう。

主人公の Asa Leventhal は、New York にある Burke-Beard and Company という雑誌社に勤めているユダヤ人で、金持ちではないが、道徳心もあり、心の悩みを持つ哀れな人間で、自分が他人の生活を破滅させたことに責任を感じている人間である。破滅させられた方の人物は、表面的な「犠牲者」である Kirby Allbee という男である。彼は Dill's Week-

ley という雑誌社に勤めていたのであるが、Asa Leventhal の友人の Harkavy というユダヤ人の家でパーティがあった時に、anti-Semitic な話をしたことから、Asa Leventhal の怒りにふれ、職を失った男である。この Kirby Allbee は酒好きで、酒を呑まない Leventhal にすれば、底なしの淵にいる人間に思える。職を失った Kirby Allbee は復讐<sup>7)</sup>の心をもやし、寄生虫のように Asa Leventhal につきまとう。Leventhal の妻 Mary が母とともに、Charleston へ移転する弟を助けに、New York のアパートを留守にしている間に、Allbee は Leventhal を公園やレストランや会社にまでつきまとい、最後にはアパートにまで入りこんでくる。そして、Leventhal の生活の非常に個人的なところまでも覗き込み、Leventhal の不在の時にはベッドへ街娼婦をつれ込んだり、挙句のはては夜 Leventhal に気付かれないようにガスの栓を開けて mutual suicide をしようとする。

この Kirby Allbee は、祖先の一人に Governor Winthrop をもつ New England の名門の出であり、ユダヤ人に対して、病的な嫌悪の情をもっている。そして、それを憶面もなくさらけ出す anti-Semite である。Allbee は、自分の病癖も、妻に逃られたことも、あらゆることを Leventhal の責任であると非難する。妻の遺産をも自分の呑み代にあててしまい、今は住居も持たない人間である。そして、自分が序々に破滅させようとしている Asa Leventhal を肉体的にも精神的にも苛み、そしてその社会的地位からひきづりおろそうと考えている。Asa Leventhal と Kirby Allbee の二人はこのような関係にいる。

最初は、Leventhal は Allbee のそういう非難を簡単に否定するが、後には、不本意ながらそれを受入れ、押しかけて来たこの男を自分のアパートに住ませて、罪に対する代価を支払うようにしむけられていく。このように Asa Leventhal は強迫観念を持っているユダヤ人で、彼は自分の不安の「犠牲者」であり、自分の立場を非常に気にしている男である。自分

の地位、立場が毎日危険な状態にさらされている alien な世界に住んでいて、他人の領域にまで割込んでしまっているという観念をもった「犠牲者」である。作品の概略をこのようにみれば、*The Victim* という作品は確かに Jew 対 Gentile, Semitism 対 anti-Semitism という問題を扱った小説であるということになる。

しかし、何故 Leventhal が自分の属性であるユダヤ人の歴史的な敵である Allbee という人間の生活を元へもどすために道義的な責任を感じるのか、何故 Leventhal は自分を破滅させようとする anti-Semitism の攻撃を信じるようになるのか、何故罪の重荷を背負わねばならないのか、ということがこの作品では重要であることに目を向けなければならない。

まず最初に Asa Leventhal がどんな人間であるかみてみよう。Leventhal は自分の弟 Max が Texas の Shipyard に仕事があるということで、住んでいる New York を離れ、その家族（妻や子供たち）を見棄てようとしている、そんな弟の子供の死に対してすら、又、弟の妻がカトリック教徒であるというにすら責任を感じている男である。Asa の唯一の誇りは、自分の働いている商業雑誌社での仕事をよくやるということであり、唯一の慰めは、暫くの間自分のもとを離れている妻 Mary に対する愛情だけである。作品の最後の章（この物語の二三年後のことを書いた章）に出てくる以外には、この作品には登場すらしめない影にすぎない妻の愛情だけに生きている男である。狂気で死んだ自分の母の記憶は Asa の心に屢々浮き上がってくるし、憂うつ症的な精神状態は周期的にヒステリー症状をも呈する男である。

しかし、ここに一つの irony がある。それはこのような状況にいる Asa Leventhal に対して、Gentile である Kirby Allbee が最初虐げられた“victim”として作品に登場することである。Leventhal が innocence であることを主張しつつけている間、Allbee は Leventhal をけおとせる自信をもつだけに止まっていて、Leventhal に次のように言う：

“... ‘Know thyself’! Everybody knows but nobody wants to admit.”

(p. 227)

こんなことを言いつづけて Leventhal につきまとうわけである。Leventhal がこのいやな侵入者のために、自分が悪者かと思うようになると、彼は Allbee の中に自分以上にみじめな、心のしずんだ人間を見出すようになる。少なくともはじめの内は、「自分は何の関係もないのだから、そんな事はかまってはおれない」「get away with it」と言って、自分に対する Allbee の非難を排除しようとする。彼は Allbee に最初はこんなように言ったのである：

“The world wasn’t made for you any more than it was for me, was it?” The error in this was to forget that neither man had made the arrangements, and so it was perfectly right to say, “Why pick on me? I didn’t set this up any more than you did.” Admittedly there was a wrong, a general wrong. (pp. 79-80)

しかし Allbee は Leventhal の非を主張しつづけ、その押しの強さによって Leventhal にそれを認めさせる。そして Leventhal は自分が作ったものでもない世界の出来事に対して道義的な責任を感じる永遠の Jew になるわけである。自分をとりまく社会の悪に苦しみながら生きる現代都会生活の中の典型的な人間になるわけである。Bellow の他の作品の名を借れば、彼こそ “Dangling Man” になるのである。“Dangling” の意味する「宙ぶらりん」の男であり、“clear connection with the proper substance” を欠く人間になる。

Leventhal はこの抜差しならぬ情況に対して容易に立ちあがることが出来ない。なぜならば、Jew として、彼は自分自身にそむいた人間であるからである。一般の Jew が anti-Semitism に対して無意識的に感染し犯されてきたように、彼もそれに感染し犯されているからである。このことは Allbee に対する態度だけでなく、友人の Harkavy や Schlossberg

との B. Disraeli についての会話からもうかがえるところである。所謂 Jew としての運命をより深めることになったわけである。

大体この作品に登場するユダヤ人は、前作 *Dangling Man* にみるように、Gentiles に感化されている人間で、墮落した Jewish spirit しかもっていない人間である。従って、実際は彼等は被迫害者であり、そういう fallen image を甦さねばならない Jew なのであるが、生きる喜びもない狭い lower middle-class という環境にあっては、窒息させられるような domestic pity のみが、ユダヤ人の文化を受け継いでいる人達に残っているすべてなのである。

Yiddish journalist の年老いた Schlossberg という人のみが、こういう空気の外に生きている唯一の人である。彼は文学的にも Bohemian であり、intellectual で、radical でさえあって、前世紀から今世紀にかけてアメリカ社会に移民してきたユダヤ人がもっていた orthodox な真の Jewish religious tradition の中にいる人間である。しかし、この小説では、この Schlossberg ですら、後継者には Shifcart という Hollywood の agent をしている男やイギリス人を装う Harkavy というユダヤ人しか持っていない。

Asa Leventhal はこういうユダヤ人の中に入ってしまったわけである。しかし、彼は、自分の父は敵の権力から自由になるのは金銭によってのみだと考えていた人間であったことを思い浮べ、一体敵とは誰なのかと自問する：

And who were the enemies? The world, everyone. They were imaginary. There was no advantage. He carried on like a merchant prince among his bolts and remnants, and was willing to be a pack rat in order to become a lion. There was no advantage; he never became a lion. It gave Leventhal pain to think about his father's sense of these things. (p. 111)

又、父が次のように叫んだことを思い出す：

*Ruf mir Yoshke, ruf mir Moshke,  
Aber gib mir die groshke.*

“Call me Ikey, call me Moe, but give me the dough....” (*loc. cit.*)

父のこういうことを思い起こすことにより、Leventhal は父の抱いていた事物に対する vision に疑惑を感じ、同化させられないようにつとめる：

“... What’s it to me if you despise me? What do you think equality with you means to me? What do you have that I care about except the *groschen*? That was his father’s view. But not his. He rejected it and recoiled from it. Anyway, his father had lived poor and died poor, that stern, proud old fool with his savage looks, to whom nothing mattered save his advantage and to be freed by money from the power of his enemies. (*loc. cit.*)

確かに、父の世代は同化させられていて、嫌悪と、傲慢さと、巧智だけしかなかったかもしれないが、それでも evil な世界に対して、又、imaginary であるかもしれないがそういう敵に対して、自分自身を防禦するすべを持っていたと、彼は思う。ではこの悩める Leventhal にとって現代世界になお棲息する迫害者とは何か、彼が苦しみつけねばならない恐怖と外界の悪は何か、ということを次に問題にしなければならない。

Kirby Allbee はユダヤ人である Asa Leventhal 以上に所謂 Jewishらしい人間であると言えよう。彼が Leventhal の知らない Jewish folklore や Jewish history を持出して Leventhal を冷笑するところがある。Allbee は Leventhal が無意識的にすてた文化遺産の symbol のような男である。そういう Allbee ではあるが、彼ははっきりした anti-Semitism をもっていて、それが彼の決定論に対する信念や免職ということと関係している。彼の目的は、Leventhal が自分に対してもっている無関心さを強



調することによって、Leventhal を罪の意識で滅ぼそうとすることである。Allbee は自分が社会的に免職の犠牲者であると考え、自分は抵抗しがたい Jew の侵出のため社会に溺れたと思うことにより、社会から受ける非難を晴らすことが出来る立場にいる。自分が苦境に陥ったのは、“blind individual”であった結果であると思い、或る時 Leventhal に次のように言う：

“...the day of succeeding by your own efforts is past. Now it's all blind movement, vast movement, and the individual is shuttled back and forth. He only thinks he's the works. But that isn't the way it is. Groups, organizations succeed or fail, but not individuals any longer...” (pp. 70-71)

これは現代のアメリカ、とりわけ New York という社会の性格をよくとらえた言葉であろう。そういう社会、あらゆる宗教様式の坩堝の中で、Leventhal は何の才智もなく、自分の道義的伝統のあらゆる苦しみを受継がねばならぬようにみえる。しかし、彼は自分の熱病にかかったような imagination の中には、New York という都会は Jew の市なのであるうか、誰も他人に話しかけたり、他人を理解することも出来ない市なのだろうか、Jew としての何の誇りもなしに、ただ Jew であるためにその罪を受け、喜びもなく、生活の苦悩のみがある都会なのだろうかと自問する。

激しい侮辱のなかにいる Leventhal が憤りを感じるのは自然である。しかし、彼はこの自問によって、自からもアメリカ社会が内蔵している成功という観念に染まっていて、その社会に止まらねばならない人間であることを知る。アメリカ社会における成功とは、先に引用した Allbee の言葉にもあるように、過去の成功とは性質を異にしたものである。個人の努力は現代世界においては意味が少なくなり、group opinion の意味が大きくなる。個人としての“victim”と“victimizer”との出会いは滑稽じみ

ものとなる。しかし、それと同時にそうであるからこそ、より意味深いものとなるのである。

これが Leventhal と Allbee のおかれている現代での状況で、その中で彼等は出会い結びついているのである。二人とも社会の力に、金銭の力の法則に敗たことを知りつくしているからこそ、これら二人の主要人物は相互の中に identification を見つけることに生きられるのである。Leventhal は Allbee の魔力に屈するだけでなく、人々の前で Allbee のために立ちあがり、個人的に彼を救ってやろうと思う。例えば、Allbee が Leventhal の部屋へ女を連込んだ時の Leventhal の怒りは、妻の不在時に人間であればするかもしれないという同情をもった者の怒りである。そして、これら二人の identification, Jew と Gentile という両極端の identification は巧みに作品の中で操られている。動物園へ弟の子供を連れて行った時、つきまとう Allbee の背中をみつめた Leventhal が Allbee の存在を認識するところなどはこのよい例であろう。そして解放されたという感じをもって、Leventhal は開眼する：――

“... Admittedly, like others, he had been the wrong.... Everybody committed errors and offences. But it was supremely plain to him that everything, everything without exception, took place as if within a single soul or person ...” (p. 169)

こういう罪の意識を持つことにより、Leventhal は自分の identity を発見し、それを発見することにより彼は人間の普遍的な魂・精神に自分の Jewish identity をゆだねるわけである。

自分が今迄関りのないようにとつとめてきた恐怖や悪の vision を Leventhal は Allbee を通して理解し、よりよき生にもどり、より賢明な、しかしより悲惨な人間となる。これはこの小説の最後の章で、二人が二・三年後、劇場で会う時の Allbee がそれをはっきりと表わしている。*Dan-gling Man* での主人公 Joseph の敗北は、*The Victim* では静かな行づま

りとなっている。

しかし、ここに更にもう一つの irony がある。最も年老いた orthodox な Schlossberg が Leventhal のいきづまりを打開するような affirmative なことを言う：

“... If a human life is a great thing to me, it is a great thing. Do you know better? I'm entitled as much as you. And why be measly? Do you have to be? Is somebody holding you by the neck? Have dignity, you understand me? Choose dignity. Nobody knows enough to turn it down.'...” (p. 134)

前述の如く、現代世界においては、個人的努力が意味のないものとなり、個人は他人の運命に responsible でないことになるわけで、一人の人間が他人に対して、責任があるかどうかをみきわめることは非常に難しい。そして、グループの意見がより大きな意味を持っている。しかし、そういう社会であるからこそ Schlossberg の言うことがより重要になるわけであり、一人の犠牲者がそれを犠牲にさせた人間と対決することが意味のあることになる。Leventhal は、自分がしたことがどんな結果を他人にもたらすかを知らずに、自分の不安の観念と paranoia 的傾向から、又、自分は自分の働く場でそれほど価値のある人間ではないという人には隠している感情から、Allbee を蹴落したことに関与したことは疑えないことである。彼は Allbee の決定論を非ヘブライ的であると考え、又、生それ自身は evil ではないが、人間は evil を犯すものであると考え、人間は苦しみに値するものであると信じている。“Admittedly, like others, he had been in wrong....Everybody committed errors and offences.” (p. 189) なのである。あらゆる責任から自由になろうとするが、人間は自己の行為には責任があり、行為の結果の現象にも責任があると Leventhal は考えるようになる。次の引用文は、Leventhal が弟の Max に言った言葉であるが、このような彼の考えをよく表わしている：

After all, you married and had children and there was a chain of consequences. It was impossible to tell, in starting out, what was going to happen. And it was unfair, perhaps, to have to account at forty for what was done at twenty. But unless one was more than human or less than human, as Mr. Schlossberg put it, the payments had to be met. (p. 154)

道徳的な面では、人間は自己の犯した罪の「犠牲者」であり、社会的な面からすれば、他人の行為の「犠牲者」である。従って、Leventhal と Allbee の関係は、Jew 対 anti-Semite という社会的に特殊な関係からはじまり、人間対人間という広い意味をもつものになる。

Jew の Leventhal と Gentile の Allbee という表面的な関係が、実は、人間対人間という本質的な関係になるという *The Victim* と Bernard Malamud の *The Assistant*<sup>8)</sup> は同じような面をもっている。

この *The Assistant* という小説の主人公は Morris Bober という名の中年のユダヤ人で、New York の Gentiles の多い地区で21年間小さな grocery store を経営している。彼は未来に対する希望ももたず、裕福になろうとも思っていない。彼にとっては、自分の店もアメリカという国も“open tomb”に思える。Malamud はそれを次のように書いている：

...Morris saw the blow descend and felt sick of himself, of soured expectations, endless frustration, the years gone up in smoke, he could not begin to count how many. He had hoped for much in America and got little. And because of him Helen [i. e., his daughter] and Ida [i. e., his wife] had less. He had defrauded them, he and the bloodsucking store. (p. 25)

この Morris Bober は、ユダヤ人は“suffering man”であり、あらゆる“schmerz”(p. 9)を持っているものであると思っている。それでも彼自身は謙虚な人間で、慈善心をもっている。自分自身が貧しいにもか

かわらず、貧しいお得意には信用貸しをし、自分の店からパンやミルクを盗んだ Gentile の Frank Alpine を養ってやりさえる。そして、「アメリカに多くを望み、殆んど何も得られなく」“for much in America and got little” (p. 25) 常に墓場に生きる孤独なユダヤ人 Morris Bober は、家族の生活も未来に対する望みも棄てて、最後に至り、肺炎で死ぬ。そして、New York の Queens にある巨大な無名人墓地に葬られる。

彼は生れながらの prisoner (“born prisoner” (p. 70)) であり、自分が Jew であるということのために、あらゆる苦しみをあじあわねばならなかった。Bober は神により彼のために隠された “light” を見つけようとするヨブの苦しみを味って葬られるのである。何故ならば、「もしユダヤ人がユダヤ人の法を忘れたならば、そのユダヤ人は良きユダヤ人でないのと同様に、良き人間でない」(“If a Jew forgets the law, ... he is not a good Jew, and not a good man.” (p. 100)) という考えを Morris Bober はもっていたからである。良きユダヤ人になるため彼は努力をした、しかし、その結果、彼は孤独感を抱き、生活を十分しとげる可能性をも信頼出来ず、暗闇の中に生きてきたのである：

He felt weightless, unmanned, the victim in motion of whatever blew at his back ; wind, worries, debts, Karp, holdupniks, ruin. He did not go, he was pushed. He had the will of a victim, no will to speak of....

The years had passed without profit or pity. Who could he blame? What fate didn't do to him he had done to himself. The right thing was to make the right choice but he made the wrong. Even when it was right it was wrong. To understand why, you needed an education but he had none. All he knew was he wanted better but had not after all these years learned how to get it.... Life was meager, the world changed for the worse. America had become too complicated. One man counted for nothing.

There were too many stores, depressions, anxieties What had he escaped to here? (p. 162)

又,

People liked him, but who can admire a man passing his life in such a store? He buried himself in it; he didn't have the imagination to know what he was missing. He made himself a victim. He could, with a little more courage, have been more than he was. (p. 181)

一方, Frank Alpine が Morris Bober の前に現れた時, 彼は孤独な stranger であり, その上, anti-Semite であった. しかし, Alpine は自分が盗みを働かねばならないのは, 社会が彼にそうさせたのであると考えていた. 彼は *The Victim* の Allbee とよく似た性格をもっていて, Bober に次のように言う:

“... with me one wrong thing leads to another and it ends in a trap. I want the moon so all I get is cheese.” (p. 32)

Anti-Semite の Alpine は, Bober の店から盗みを働くだけでなく, 彼を hold up までさせるが, Bober の revelation に対して重要な役割を果たす. Bober は, Alpine の中に人間としての fatal limitations からのがれるすべを見出すのである. 他人に信用貸すらする Bober は, 自分の店からパンやミルクを盗んだのが Alpine であり, 自分を hold up させたのも Alpine であることを知りながら, 彼を使用人として雇い入れる. 店で働くようになってからでも Alpine は商品を盗みつづけるし, レジスターから売上金を誤魔化しすらする. しかし, その時においてすら, Bober は自分が「人間」になるために Alpine を Gentile としてではなく「人間」としてみようとしていたのである. Bober の葬儀の時 Rabbi はこのように言う:

“When a Jew dies, who asks if he is a Jew? He is a Jew, we

don't ask. There are many ways to be a Jew....'Yes, Morris Bober was to me a true Jew because he lived in the Jewish experience, which he remembered, and with the Jewish heart.' Maybe not to our formal tradition—for this I don't excuse him—but he was true to the spirit of our life—to want for others that which he wants also for himself. He followed the Law which God gave to Moses on Sinai and told him to bring to the people. He suffered, he endu-red, but with hope ..." (p. 180)

確かに、この「人間」になる過程において、Bober は ghetto-isolation から脱出することが出来なくて、巨大な錯綜したアメリカの中にとちこもって悩まなければならなかった minority-race の "victim" であった。しかし、ここで重要なことは、この作品の意味はそれだけではないことである。Malamud が Morris Bober を Jewish identity にした理由はそういう minority-race を "victim" にすることによって、それ以上の効果をもとめているのである。

Morris Bober の答えは不幸に見えるかもしれないし、彼の勇気は十分ではなかったように見えるかもしれない。しかし、Bober にとっては、彼の答えこそ、又、彼の勇気こそ意味のある重要なことであったのである。何故なら、彼は自からを大文字の Man にし、大文字の Man として死ぬことが出来ただけでなく、Gentile である Frank Alpine をも彼を通して大文字の Man にさせたからである。

Bober にとっては墓場であった彼の店が Frank Alpine にとっては避難所になっても不思議ではない。確かに Alpine は店から売上金を盗むのをなかなか止めなかったし、主人を hold up させたこともあった。しかし、Bober が妻にせめられて、仕方なく Alpine を解雇すると、Alpine は「生れかわった人間」"a changed man" (p. 156) になり、Bober の救世主になる。そして Bober の死後は再び店員となり、今度は店でよく

働き、レジスターへ盗んだ売上金を返済しかける。Morris の娘 Helen を大学へ行かせてもやる。Morris Bober には借があるから、自分は無報酬で働かねばならないと言う。最後には自から割礼を受け、Jew になる。Gentile が Jew になることは社会的にみても決して屢々あることではないが、彼のこの行いと考えの背後には、彼の借りは Morris Bober だけに對するものではなく、humanity に對するものだという考えがある。ここで重要なことはこれである。ユダヤ人の Leventhal がそうであったように、Alpine は humanity の “victim” なのである。Alpine はこんな風に考えている：

“Jesus,” he [i. e., Frank Alpine] said, “why am I killing myself so?” He gave himself many unhappy answers, the best being that while he was doing this he was doing nothing worse. (p. 189)  
 ...he changed into somebody else, no longer what he had been...  
 he has changed in his heart ... (p. 191)

このように Bober と Alpine の関係は Jew 対 anti-Semite という関係を越えて、人間対人間の関係になる。

*The Victim* の Asa Leventhal は “marked man” である Jew であった。Anti-Semite の論義に直面して、彼は Jew であるという identity をもたねばならなくなり、そうすることにより、他人の罪をきる “victim” である Jew としての役割を受入れなければならない運命にあることを知った。Leventhal は anti-Semite の “victim” になると同時に、自分は alien であるという確信が彼を “victimizer” にした。同じことが Morris Bober についても言える。

これは detachment の可能な世界から commitment の世界に入ることである。そして、罪と責任という最後の認識には、その経験を通して行かねばならないのである。Leventhal が自分は “victim” であり “victimizer” であるという認識をすることは、社会の member であり outsider



でもあるという dual role を持っていることである。逆に言えば、Jew であることは何を意味するかを分らずにいることは、人間であることは何であるかを理解出来ないということである。

勿論、*The Victim* でも *The Assistant* でも、“victim” イーコル “Jew” であるとか、“Jew” イーコル “victim” であるということが言われているわけではない。Jew も anti-Semite も相互に “victim” であると同時に “victimizer” であることが問題なのである。Gentile の Allbee は狂人であり、anti-Semite でもあろう。しかし、Leventhal にとっては Allbee は人間が他人に対する責任の本質と限界を理解させてくれる役割をもっている。Allbee は Jew の self-pity にとっては必要な agent なのである。それはアメリカという社会における Jew の identity の awareness を感じさせることであり、又、人間としての awareness を感じさせることである。それ故に、Asa Leventhal の苦闘は彼自身の self-consciousness, self-definition の本質的なものとなった。彼はここにおいて最早 Jew ではなく、一個の人間になったわけである。*The Assistant* の Alpine は Jew の Morris Bober を殺ろそうとさえたが、自から最後には Jew となった。これは Jew である Bober が「人間」であったことを悟り、自からも「人間」になるためであった。従って、本質的な意味での「人間」になった Asa Leventhal や Morris Bober が永遠の追放にいる Jew でありながら、Jew である属性をぬぎすてた人間であることが、これらの小説で、人間は “victim” であり “victimizer” であることの意味を高めているのである。人間は人間関係の枠内では、すべて “victim” であり、生きることは自分の行為に対して責任があるということである。ここにおいて、*The Victim* の epigraph である *Thousand and One Nights* の “The Tale of the Trader and the Jinni” からの引用の意味も明瞭になるわけである。

以上考察したように、Semitism や anti-Semitism の問題は、これらの

小説の素材であり、小説の意義はその奥にあると言えよう。

註

- 1) Jerome Weidman には次のような作品がある：  
*I Can Get It for You Wholesale* (1937), *What's in It for Me?* (1938), *I'll Never Go There Any More* (1941), *The Lights Around the Shore* (1943), *The Price Is Right* (1949), *The Enemy Camp* (1958), *Tenderloin* (1961).
- 2) Leslie Fiedler: "Saul Bellow," *Prairie Schooner*, 31 (Summer 1957), p. 106.
- 3) Paul Goodman の作品でこの特長を最もよく表わしているのは, *The Empire City* (1959) と *Growing Up Absurd* (1960) であろう。
- 4) Bernard Malamud には外に, *The New Life* (1962) と 短篇集 *Idiots First* (1963) がある。
- 5) Saul Bellow には外に, *Dangling Man* (1944), *Seize the Day* (1958), *Henderson the Rain King* (1958), *Herzog* (1961) がある。
- 6) 以下 *The Victim* よりの引用は Saul Bellow: *The Victim*, New York, The Viking Press (Compass Books edition), 1956 による。
- 7) ... drinking liquor is not forbidden (in Judaism)—but drunkenness is sharply condemned. Students of Jewish family life have frequently observed that intoxicating drinks can be found in nearly every Jewish home, but drunkenness is nevertheless a rarity. Morris N. Kertzer: *What is a Jew?*, New York, Collier Books, 1961, p. 53.
- 8) 以下 *The Assistant* よりの引用は Bernard Malamud: *The Assistant*, New York, The New American Library (A Signet Book), 1957 による。
- 9) Rabbi Morris N. Kertzer によると non-Jews が Judaism に改宗する大部分は non-Jews と Jews との intermarriage の場合にみられる。(cf. Rabbi Morris N. Kertzer: *Op. cit.*, p. 178.)

更に、この intermarriage ですら、ごく稀なことである。Joachim Prinz によれば、

Intermarriage, which loomed so large in the European analysis of the Jewish situation and which seemed such a natural by-product of social adjustments, remains a surprisingly insignificant fact in American Jewish life. The statistics published in 1957 by the United States Census study of religion reported the Jewish percentage of mixed marriages to be the

smallest of any religious group; while 8.6 per cent of all Protestants were married to non-Protestants and 21.6 per cent of all Catholics to non-Catholics, the figure for the Jews was a mere 7.2 per cent. (Joachim Prinz: *The Dilemma of the Modern Jew*, Boston, Little, Brown and Co., 1962, p. 180.)

〔付記〕

Saul Bellow や Bernard Malamud を論じたもので、*The Victim* 及び *The Assistant* にも論及した主なものには次のようなものがある：

John W. Aldridge. "The Society of Three Novels," *In Search of Heresy*. New York: McGraw-Hill Book, 1956, pp. 131-139.

Edmund Bergler. "Writer of Half Talent," *American Literature*, XIV (Summer, 1957), 154-164.

Richard Chase. "The Adventure of Saul Bellow," *Commentary*, XXVII (April, 1959), 323-330.

Chester Eisinger. "Saul Bellow: Love and Identity," *Accent*, XVII (Summer, 1958), 179-203.

Leslie Fiedler. "Saul Bellow," *Prairie Schooner*, 31 (Summer, 1957), 103-110.

Ralph Freedman. "Saul Bellow: The Illusion of Environment," *Wisconsin Studies in Contemporary Literature*, I (Winter, 1960), 50-65.

Maxwell Geismar. "Saul Bellow: Novelist of the Intellectuals," *American Moderns*. New York: Hill and Wang, 1958, pp. 210-224.

Ihab H. Hassan. "Saul Bellow: Five Faces of a Hero," *Critique*, IV, No. 3 (Summer, 1960), 28-36.

Ihab H. Hassan. "The Qualified Encounter: Buechner, Malamud, Ellison" and "Saul Bellow," *Radical Innocence*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1961, pp. 161-168 and pp. 290-324.

Alfred Kazin. "Bernard Malamud: The Magic and the Dead" and "The World of Saul Bellow," *Contemporaries*. Boston: Little, Brown, 1962, pp. 217-223.

Marcus Klein. "A Discipline on Nobility," *Kenyon Review*, XXIX, No. 2 (Spring, 1962), 203-226.

Paul Levine. "Saul Bellow: The Affirmation of the Philosophical Fool,"

*Perspective*, 10 (Winter, 1959), 163-176.

Jack Ludwig. *Recent American Novelists*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1962, pp. 7-19 and pp. 39-41.

Theodore Ross. "Notes on Saul Bellow," *Chicago Jewish Forum*, XVIII (Fall, 1959), 21-27.

Earl H. Rovit. "Bernard Malamud and the Jewish Literary Tradition," *Critique*, III, No. 2 (Winter-Spring, 1960), 3-10.